いただきます！鈴瑚のグルメレポート

ワン眞瑠★

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

幻想郷で生きるイーグルラヴィ、鈴瑚。

彼女は、ある日出会った伝統の幻想ブン屋に誘われ一つの契約を結ぶ。

それは「美味しいものをたくさんご馳走する代わりに、新聞作成に協力すること」

食いしん坊の鈴瑚はその契約に飛びついたのだが……

交わることのなかった2人が手を結んだことで、どんな料理が出来上がるのか。

それではみなさんご一緒に、いただきます！

目　次

第1話　空腹兎 ―――――― 1
第2話　華麗なるカレーライス ― 12

第1話　空腹兎

四季が一度に訪れた異常気象もようやく落ち着き、幻想郷はいつもの陽気を取り戻した。燦然と輝く太陽が大地を焦がし、吹き行く風には息をするのもためらうほどの熱気が感じられる。今の季節は真夏。山々は太陽の光を受け眼のにじむような緑色に輝き、ジリジリという蝉の大合唱がそこら中から聞こえる。

あー、暑い……。

アジトにあるベッドに仰向けで横たわり、ボーっと天井を眺める。窓を開けているのに入ってくる風はサウナのように熱く、さらにセミの鳴き声ががんがん頭に響いてくるから、何かをする気力も意欲もゼロに近い。ここ幻想郷で暮らすと決めたあの日から何回目の夏を迎えたのか、熱気のせいで頭が働かないから思い出せないけど、今年の夏は今までで一番暑い。うん、きっとそうだ。四季異変の影響が残っているからかもしれない。ああ、異変が終わった後の季節は春か秋が良かったなぁ。春はさくらんぼ、イチゴ。秋は柿、栗、芋……。うっ、果物のこと考えていたらお腹空いてきた。

ぐりゅりゅうぅぅ～～

「はぅっ」

うげー本当に鳴っちゃった。仕方ない、何か食べるものがないか探してみよう。できれば甘く冷たいものがいいなぁ。

そう思い一通りアジトの中を探し回ってみたが、残念ながら食べ物を見つけ出すことはできなかった。食糧貯蔵庫の扉は鍵がかかっていたしなぁ。うう、暑い中動いたから余計にお腹が減っちゃった。どうしよう。

ぐぅぅぐりゅりゅう～～！

お腹の虫が今までにないほど盛大に唸り声を上げる。さっきからこうやって何度もお腹を撫でて気を紛らわせようとしているのに、お腹の虫は静かになるどころか逆に激しく訴えかけてくる。何かを口に入れないと干からびて死んでしまいそうなのに、今自分の周りには食べられそうなものが一つも見当たらない。頼みの綱だった食糧貯蔵庫は鍵がかかっていて、肝心の鍵は相方が持っているため食べ物を取り出すことはできない。相方はこの暑い中情報収集のためアジトを離れていて、いつ帰るのかは分からない。この無い無い尽くしの今の状況、ものすごくひもじい。

「ううぅ、せいら～～ん!!」

相方の名前を叫んでも、私の声は空しく空中に漂って消えた。もちろん返事は聞こえ

ないし、目の前に清蘭が現れることもなかった。今このアジトにいるのは私一人、他には誰もいない。壁に掛けられた時計にちらっと眼をやると、時計はお昼の12時を指し示している。一番お腹が空く時間なのに、食べられるものが身の回りに何一つない。ああ、こんなことなら朝食をもっと食べておけばよかった…。

虚無感にさいなまれながらベッドに寝転がっていると、頭を一つの考えがよぎった。いや、暑さで頭がやられたのか、突拍子もない考えが浮かんだ。

「守屋神社で何かもらおう」

でも、確かにこの方が多少はましなのかもしれない。このままここでずっと待っていても空腹は満たされることはないだろうからね。

守屋神社の、いや妖怪の山に住む皆さんと私たちの間には広く深い溝があった。私たちが初めて幻想郷に降り立ったのは地上を植民地とするためであった。その一環として浄化のために地上探査車を送り込んだが、そのせいで妖怪の山の植物が枯れてしまった。山に住まう妖怪たち、特に山の神である神奈子様は山の環境を破壊した私たちを許すはずもなく、特に二柱の神様の怒りは尋常じゃなかった。

地上侵略で枯らしてしまった植物を、私と清蘭が率先して植樹し、謝罪して回り、杯を交え、今ではそれなりに良い関係を築くことができた。それに神奈子様からは「何か困ったことがあれば家に来なさい」という言葉もいただいた。今こそ、その言葉に甘え

て守屋神社の皆さんを頼る機会なんじゃないのかな。
それに、外に出れば、何かしら食べられるものが見つかるはずだ。月の都と違って、ここ地上にはたくさんの食べ物で溢れているはずだ。それに、動いていれば空腹のことも忘れられるだろう。
「いつも清蘭に頼ってばっかじゃいられないもんね！」
自分に言い聞かせるように声に出し、アジトを飛び出した。

「ほぉ～」
アジトを飛び出して獣道を抜けると、目の前には大きな湖が広がっていた。燦然と輝く太陽から降り注ぐ眩しい光を受けて輝く湖は、周りの木々の葉の緑色と協調し合い、見事な絶景を形作っている。それに加えて、湖のところどころから顔を出す無数の巨大な柱。巨木ほどの太さを持ち、何かしらの規則性を持って並んでいるその姿は、幻想的で荘厳な雰囲気を醸し出している。あの時は弾幕ごっこに集中していて景色に目を配ることはできなかったけど、落ち着いてじっくりと見てみたらものすごく素敵な場所だと知ることができた。やっぱり、何回見てもこの景色には圧倒される。
しかし、景色に感動しつつも頭の中は食べ物のことでいっぱいだ。今まで培ってきた

情報を総動員し、食用に値するものがないか必死に目を凝らした。
「さすがに柱は食べられないしなぁ…。葉っぱも、食べるものではなさそうだし…」
しかし、めぼしいものは何一つ見当たらなかった。今まで蓄えてきた情報を活用しなくても、葉っぱや、枝、巨大な柱といったものは食用に値しないことは明らかだ。味が悪そうだし、栄養も吸収できない。仮に口に含んだとしても、お腹は満たされても精神的には満たされないだろう。
そうなると残された場所は湖の中しかない。こんなにも清らかに澄んだ水だ。魚の1匹や2匹どこかに泳いでいるだろう。群れを捕まえれば今後の食料として備蓄することもできる。それに、この冷たくて清らかな水の中に飛び込んじゃえば、真夏の熱気からも解放されるだろう。
「まずは様子見かな…」
今いる場所の水深は浅く、魚の姿はどこにも見当たらない。もう少し深い場所に行けば、きっと魚がいるはずだ。まずは、前方に見える、水面からひょこっと顔を出した小さな島まで飛んでみよう。
空中に飛び上がり、水面に目を向ける。青く澄んだ水ではあるが、小島へ近づいていくほど水の色がどんどん濃くなっていく。
「一体この湖はどれだけ深いんだろう?これじゃあ魚の影すら見つけられないよ……」

　ぽつんと浮かぶ小島に降り立ち、きょろきょろと辺りを見回す。どうやらこの小島は湖のほぼ中心に位置しているようだ。そして、小島の中心に建つ小さな祠。この祠は何を祀っているのだろう。だとしたら、この湖はかなり神聖なものなのだろうか。幻想郷に移り住んで結構経つけど、こんなすぐ近くの湖に祠があったなんて、なんで今まで気づかなかったんだろう。恐らく、情報ばかり集めておいて、自分の目で確かめることがあまりなかったからかな。

　いや、それよりもまずは魚だ。ここにはお参りに来たのではない、魚を探しに来たのだ。水面に目を凝らしても、やっぱり魚の影を見つけることはできなかった。これだけきれいな水だ、魚の１匹や２匹くらいいてもいいはずなのに、これだけ探してもいないのは何か理由でもあるのだろうか。この島に祠があることと何か関係が……？

「収穫は無し…か。」

　ポツリ、と小さなため息をつく。まあ仕方ない、ここは山の中だ。魚がダメなら山の中に潜む獣を捕獲して肉を食べればいい。とりあえず、せっかくだから祠にお参りしよう。どうか、無事に食べ物が見つかりますように。ぱんっと両手を合わせ、目を閉じて心の中で唱えた。

「へぇー。祠にお参りとは、感心だねぇ！」

「んぇっ!?」

突然背後から聞こえた声に驚き、あわてて後ろを振り返った。そこにいたのは、金色の髪をした小さな女の子だった。くりっとした大きな目玉が二つ付いた奇妙な帽子をかぶり、どこか幼さを秘めた顔立ちをしている。この顔には見覚えがあった。さすが神様というか、彼女から伝わってくるこのオーラや気迫は凄まじい。

「よっ、こんにちは鈴瑚！」

「もー、なんだ諏訪子様か。びっくりさせないでくださいよ！」

目の前にいたのは、神奈子様と同じ二柱の一人、神様の洩矢諏訪子様。目を閉じていたとはいえ、私の背後に音もなく表れるとはさすが神様。

どうしよう、本当にびっくりしちゃった。だって、私は警戒を怠らなかった。風の流れを感じ、物音一つに耳を傾け、しっかりと周りに注意を向けていた。月の都で軍人として厳しい訓練を積み、修羅場も幾度と潜り抜けてきた。警戒心も他の兎より一倍強い物と自負していた。それなのに、それなのに……。

「いやーごめんごめん、妙に真剣な面持ちでお参りしてたからさ、何かあったのかと思ってね」

そう言った諏訪子様は、私の心の動揺に気付いたとも気付いていないとも受け取れるような、ニヤニヤとした笑みを浮かべている。まるで心の中までも見透かされているような。

「実はですね……」
お腹が空いているんです。という言葉を口に出そうとした瞬間……。
ぐりゅりゅりゅうぅぅ〜〜っ
お腹の虫が今まで以上に盛大な唸り声を上げた。もう、私よりも先に状況を説明しないでよ！
「あっはっはっは！なんだ、お腹が空いているんだね！」
げらげらと腹を抱えて笑い転げる諏訪子様の問いに、私は頷くことしかできなかった。たぶん今の私の顔、トマトみたいに真っ赤になっているだろうね。
その後、諏訪子様にお腹が空いていること、相方の清蘭が食糧庫の鍵を持ったまま出かけていて当分帰らないこと、暑さで干からびそうなことを伝えた。彼女は私の話を最後まで真剣に聞いてくれると、うんと大きく頷いた。
「そういうことね！だったら家においでよ！家はもうすぐお昼ごはんの時間だから、もしよかったら鈴瑚も一緒に食べない？」
「いいんですか!?うわぁ、ありがとうございます！」
まさか本当にご馳走してくれるなんて思ってもみなかった。神頼みとはまさにこのことね！清蘭には悪いけど、先にお昼ごはんを頂きましょう！何を食べているのかな？和食かな？それとも意外と洋食だったりして。ご飯は誰が作っているのかな？やっぱ

り早苗さんかな。ああもう、ご飯を頂けると思った途端そんなイメージが止まらない。今から楽しみだよー！と、頭の中でそんなことを考えながら、前を行く彼女の背中を追いかけてルンルンとスキップしながら歩いていると、彼女は不意に立ち止まった。

「そう言えば鈴瑚。あなた、湖の魚を食べようとしていなかった？」

その一言に、全身が氷のように一気に固まってしまった。だらだらと嫌な汗が頬を伝い、背筋を冷たいものが流れていくのを感じる。それはなにか、一言で言えば恐怖だ。一瞬のうちに私の全身を駆け巡ったものがそれだ。諏訪子様の放った声には、脅しや怒りのようなものは一切感じられなかった。しかし、こちらを威圧するには十分すぎるものが込められていた。

「あ、いえ、そ、そんなこと……」

全身を襲う恐怖を悟られないよう、平静を装いながらやっとの思い出でひねり出した声に、諏訪子様はただ小さく頷いた。

「そう、ならいいけど。もし本当に食べようとしていたのなら……」

思わずごくりとつばを飲み込んだ。

「祟るよ？」

こちらを振り返った諏訪子様はニタァっとした笑みを浮かべていた。この世のものとは思えないほど冷たく、恐ろしいものだった。

あの時本当に魚を獲ろうと湖にでも飛び込んでいたら、きっといま私は三途の川を泳いでいたことだろう。そう考えると、今もブルブルが止まらない。内心ビクビクしながら諏訪子様の後ろについて山道を進んでいく。

気持ちを落ち着かせる意味も込めて、周りの景色を観察する。あまりこの辺りを歩いたことがないから、目に入る景色が新鮮に見える。綺麗に敷き詰められた石畳の道の両側に、先ほどの湖にもあった巨大な柱が何本も等間隔に並んでいるのが目に留まる。一体この柱は何なんだろう。このように等間隔に並んでいるということには、何かしらの意味があるのだろうか。やっぱり、あの湖は神聖な場所だったということかもしれない。中央に祠があったことを加味すると、その可能性は限りなく高い。だから魚を獲ることを諏訪子様は許せなかったのだろう。これからは細かいものも含めて、より多くの情報を集めて行かないとこの身を滅ぼしてしまう可能性だってあるのかもしれない…。

「ねえ鈴瑚、もうすぐ着くよ」

「ふぇ?あ、本当ですか?」

諏訪子様に声をかけられたことで、考察の世界から引き戻された。もうすぐで守屋神社に着くらしい。道を歩いてきたから、これで自分一人でも歩いていけるな。さあ、今日のお昼ご飯は一体何だろうな。

守矢神社の境内に入ると、途端に空気を漂ってなんだか芳しい香りが漂ってきた。鼻

をくすぐり、食欲を増進させるようなスパイスの効いた香りだ。これは月の都で食べたことも、ましてや嗅いだこともない刺激的な香り。これはもしかして……。
「あ、鈴瑚の鼻、ものすごくヒクヒクしてる」
「ふえっ!?あ、すみませんつい癖で」
諏訪子様に指摘され、はっと我に返る。いい匂いが漂う空間に来ると無意識のうちに鼻をヒクヒクさせてしまう癖が出ちゃったかぁ。無意識だから自分でどうこうできないし、人前でやっちゃうのはとても恥ずかしい。これも情報収集の一環だからと言い訳しておきます。
「あ、諏訪子様、この匂いってもしかしてカレーですか?」
「おお、よく分かったね、さすがの鼻!今日は熱く辛い物を食べて思い切り汗を流そうって言ってたからね!さあ鈴瑚も思いっきり汗を流そうよ!」
「ありがとうございます!いただきます!」
本当は暑さが吹き飛ぶような冷たいものを食べたいと思っていたけど、暑い中熱いものを食べて汗を流すのも悪くないわね!

第２話　華麗なるカレーライス

「早苗ー、ただいまー」

諏訪子様は私に向かって手招きすると、守矢神社の中に、まるで消えるように入っていった。しかし、やっぱり何度見ても荘厳で趣のある雰囲気が漂っている。まるで心が引き締まるような感じね。こんな山の中にあるのに、境内には落ち葉１つ無いし、神社にはホコリや汚れ、傷などが全く見当たらない。いつ観光客や参拝客が来てもいいように、掃除や手入れが隅々まで行き届いている。神様の２人が掃除するとは考えにくいし、そう考えると早苗さんってあんなチャラそうな見た目なのに意外としっかりしてるのね。

「おーい鈴瑚ー！来ないの？」

「あ、はーい！行きまーす！」

諏訪子様が神社の入り口で手を振ってくれている。待たせてしまうのは申し訳ないし、お言葉に甘えて思いきりいただきます！

守矢神社の廊下を進むと、カレーの芳しく芳醇な香りがどんどん強く感じ取れるようになってきた。どんな具材を入れているのかな？カレーのルーは甘口かな？それとも口から火が飛び出るほどの激辛なのかな？ああもうカレーのことを考えているとよだれが出ちゃいそう！

「鈴瑚、また鼻がヒクヒク動いてるよ」

「ええっ!?あちゃー、また無意識のうちに……」

「アハハハッ、鈴瑚って本当に食いしん坊なんだね！早苗は最近料理に凝ってるみたいでね。大丈夫、味は保証するよ」

「そうなんですね！いやーそれは楽しみです！」

匂いに誘われるまま廊下を進み、守矢神社の奥にある居間へとたどり着いた。居間には中央に大きく丸い卓袱台が置かれ、その上に人数分の箸やスプーンが並べられている。そして卓袱台の中央には大きなお皿に盛られた、色鮮やかなサラダが眩しく輝いている。新鮮で瑞々しいレタスにキャベツ、真っ赤に輝くトマト、そして大きめに切られたジャガイモが顔をのぞかせるポテトサラダ。それに何より、サラダの頂点にドンと鎮座し、燦然と輝く千切りの人参！ああもうこのサラダを見ただけでワクワクが止まらない！早く食べたい！

諏訪子様に促され、座布団の上に腰を下ろす。あらためて居間を見渡してみると、神

社に負けないくらい趣ある部屋だ。部屋には書院造の床の間があり、誰が描いたのか分からないけどなんかすごそうな掛け軸がかけられている。そして隅々まで綺麗に掃除されている。こんなに広い神社の中を綺麗に掃除するのは一体どれほどの時間と労力がかかるのだろうか。

部屋を見回していると、障子が開く音が聞こえ、居間に早苗さんが入ってきた。

「あー、鈴瑚さん！とうとう非常食になる気になったんですね!?」

「そんなわけないですよ！もう！」

早苗さんは私の顔を見るなり、目をキラキラと輝かせてとんでもないことを口にした。あの異変で妖怪の山の自然を破壊してしまったことに早苗さんも怒りを覚えたのだろう。関係を改善できた今でも、早苗さんは私たちを見るなり「兎肉」とか「食料」とか開口一番物騒な言葉を口にするようになった。冗談だと分からなかった時は清蘭も私も心底震え上がってしまった。だって嘘とも本当ともとれる表情に加え、目の輝きが判断を迷わせる。いい加減やめてほしいんだけどなぁ。

「おっ、非常食に兎肉とはなかなか乙なもんじゃないかい」

「あー、もう神奈子様までそんなこと言わないでくださいよー！」

もう早苗さんに乗っかってこないでよ、神様が言うと恐ろしさ倍増なんだけど。っていうかいつの間にそこに座っていたんですか!?神出鬼没というか、神様ってすごいの

ね。でも、改めてこの3人を見ていると、かなりすごい面々だ。3人の神様に囲まれていると自然と身が引き締まる。

「さあ、諏訪子様もご自分の席に座ってください。今からカレーライスを持ってきますね！」

「あ、私も手伝いましょうか？」

「そう？ありがとうね！じゃあ私について来てください！」

早苗さんの後に続いて神社の台所へ生まれて初めて足を踏み入れた。おお、神社の台所だから、てっきり土間や釜戸なんかがあると思っていたけど、台所の床はフローリングだし、コンロやレンジ、巨大な冷蔵庫にオーブンまで備え付けられている。ここに置いてある設備はどれも最新型じゃないか。これは料理にハマるのも無理はないかもね。そして、何より台所に入った瞬間カレーの芳しい香りが一層強く感じられる。そのカレーのありかは、絶対にコンロの上に載せられた鍋の中だ。ああ、この香りを嗅いでいるだけでどんどんお腹が減ってきたよ……。

ぐぎゅるるるぅぅぅ～

「あっ……」

もう待ちきれないと言わんばかりにお腹の虫が大きな声で鳴き叫んだ。

「ふふふっ、そんなに慌てなくてもいいですよ。ではそこのお盆を持ってきてくれませ

んか？」
「はっ、はい」
途端に恥ずかしくなって、真っ赤に染まった顔を見せまいと早苗さんが指差した方向に顔を向けた。指さした先には大きな食器棚があり、下段に３段の引き出しが備え付けられている。早苗さんに言われたとおり一番上の引き出しを引くと、中に大きなお盆が入っていた。
そのお盆へ手を伸ばそうとした直後、鼻をくすぐる、食欲にガツンと直撃するスパイシーな香りが台所いっぱいに広がった。ああもうよだれが止まらない！
「じゃあこれ、気を付けて持って行ってね」
「はい！」
私が持っていったお盆に、早苗さんがお皿に盛られたカレーを２つ載せてくれた。わああ、守矢神社のカレーってこうなんだ！具材はジャガイモに豚肉、玉葱、そして人参！使われている具材はオーソドックスなんだけど、どれも大きめに切られていて、食材の味や食感を楽しむことができそうだ。純白に眩しく輝く白米と色が濃いルーの対比が美しく、これはもう一目見ただけでもう美味しいってわかるよ！
「はい、お待たせいたしましたー」
つまみ食いをしたい衝動を抑えながら、そう言って神奈子様と諏訪子様の前にカレー

ライスを差し出すと、お礼を言って受け取ってくれた。そして自分の席に戻ると、早苗さんが自分の分を持ってきてくれた。それを受け取った途端、嬉しさで思わず歓声を上げてしまった。なぜなら……

「わあああ！人参がいっぱい!!」

「お手伝いしてくれましたし、そのお礼ですよ」

「ありがとうございます!!!!」

カレーライスのルーの中には、大きく切った人参増し増しで入ってる。人参は私の大好物だよ！

早苗さんも自分の席に着いたところで、さっそく頂きましょう！私は、食事をするときは絶対にあの言葉を口にするよう小さいころからしつけられてきた。例え生死を分ける戦場でも、寝起きで頭がボーっとしている時も、一回たりとも欠かしたことがないあの言葉。さあ両手を合わせて、目を閉じて。

「いただきます！」

私たちが生きていくためにその命をささげてくれた多くの食材に感謝の気持ちを込めて。

心の中でお礼を述べ、ゆっくりと目を開ける。目の前には早苗さんが作った大盛りのカレーが一つ。スプーンを手に持ち、ルーの中に差し入れる。程よいとろみが付いてお

り、スプーンによくからむ。私はどちらかというと、さらっとしたルーよりもこのように少しどろっとした方が好きだ。ご飯をすくい、ルーにくぐらせて……。あ、ついでに豚肉も乗せよう！もう待ちきれないと言わんばかりに、勢いよくスプーンを口に入れた。

「あーんっ！」

口に入れた瞬間、あまりの美味しさに驚き目を丸くしたが、カレーの味に浸るようにゆっくりと目を閉じた。

ん、んまぁーい!!何このカレー！使われている具材は一般的な物とほぼ変わらないのに、なんでこんなにも濃厚で奥深い味わいなの!?口に含んだ瞬間舌や粘膜を駆け巡るスパイシーな辛さ。でも強く鋭くない、優しい辛みが口の中を刺激し、数種類のスパイスの香りが鼻へと抜けていく。そしてその後からやってくるまろやかで芳醇な風味。野菜の甘味、肉のコク、それらが混ざり合って見事に調和したルーの旨味が口いっぱいに広がる。それだけじゃない。一緒に食べたこの豚肉。大きめに切られているのに、軽く噛んだだけでほろほろと解けるような優しい食感。噛むたびに溢れ出す肉の濃厚でこってりとした脂の甘味とコク。それが口の中でルーと混ざり合って、お互いの味をより引き立たせる。

「あむっ！」

そして今度は私の大好きな人参を二つすくい上げ、パクッと頬張る。人参特有の苦みは感じられず、本来持っている見事な甘みが噛むたびにほどけ、優しく口の中に広がる。歯を入れるときにわずかに押し返される程よい硬さも相まって、ずっと噛んでいたくなるくらいだ。これは早苗さん、下ごしらえの時から手を抜いてないな。さっき諏訪子様が料理に凝っていると言っていたけど、これはもうプロの領域でしょ！

……もう我慢できない！カレーをライスごと豪快にすくい、勢いよく口に放り込む。そしてそのままジャガイモ、ニンジン、豚肉、玉ねぎもすくいあげ、文字通り口いっぱいに頬張った。

「んんーっ！」

ああー、たまらない！一回一回咀嚼するごとに、豚肉の柔らかさやニンジンの弾力、ほくほくとしたじゃがいもに、程よい歯ごたえのご飯、それぞれの食感を感じることができ、噛むのが楽しくて止められない。そして噛むたびにそれぞれの持つ旨味やコク、奥深い味わいが一つに混ざり合い、調和し、口の中隅々まで広がっていく。そしてごくっと飲み込むと口の中に優しいスパイスの風味が残っていて心地よい。

「ふぃー」

今、初めて暑いと感じた……。今までカレーの味に集中し、堪能し、余韻にどっぷりとつかっていたため、自分が汗をかいていることにたった今気付いた。これほどすがす

がしい汗をかいたのはいつ以来だろうか。額を流れる汗を腕で拭い、キンキンに冷えた水を一気にゴクゴクと体に流し込んだ。突き抜けるように流れ込んでいく冷たい奔流は、夏のうだるような暑さと、カレーで火照った体を優しく冷ましてくれた。

「っぷはぁー！」

ふぅーと長めに息を吐いて一息ついたとき、３人がじっと私の方を見つめていることに気が付いた。

「え、えっ!?皆さんどうしました!?」

「いやー、だって鈴瑚があまりにも幸せそうに食べていたから、つい見ていたくなっちゃってねぇ」

そう言いながらニヤニヤとした表情を浮かべている神奈子様を見ているうちにどんどん恥ずかしくなってきた。ほかの２人も笑いながらうんうんと頷いているのを見て、一気に顔が赤く染まっていくのが分かった。

「それに、食べているときに耳がヒクヒクと動いていましたよ。鈴瑚さんって可愛らしい所もあるんですね！」

「もう！見ないでください！」

早苗さんから言われた衝撃の事実に、思わず顔を両手で覆ってうずくまった。え、耳が動いてた!?え、今まで全く気が付かなかったの!?もしかしてこれって私の癖!?無意識

に動いていたの!?……っえ、じゃあ清蘭はこのこと知ってたの!?知ってて教えてくれなかったの!?

あまりの恥ずかしさに思わず頭がパニックになった。頭の中で次々とわからないことが浮かんでは消えていく。一体私はいつから美味しいものを食べると耳が動くようになったのだろうか?どうして動くの?今暑さともカレーの熱気とも違う汗をだらだらとかいている。ああもうどうしよう……。

「ま、まあ気にしすぎですよ。気持ちを切り替えてカレーを食べましょう」

「う、うん。そうする」

確かに早苗さんの言うとおりだ。こんなことといつまでも気にしていてはしょうがない。あとでアジトに帰ったら清蘭を問い詰めるとして、今はこのカレーをしっかりと堪能しよう。

「あむっ!うん美味しい!」

「ほら、また耳がひょこひょこ動いてる!」

「ちょ、ちょっと諏訪子様!」

カレーを夢中で頬張りながら、私は心に誓った。開き直ろう。もう気にしないことにしよう。これが私の個性であり癖なんだ。それに早苗さんが言ってくれた、「可愛い」と。そう、私は可愛いんだ。美味しいものを食べるときに無意識のうちに耳をひょこ

ひょこと動いちゃう私は可愛いんだ。そう言うことにしよう。ＭＧＭＧ……。

カレーを堪能していると、外で何やら物音が聞こえた。誰かがやってきたのだろうか。そしてその後に響いた女性の声。私はその声に聞き覚えがなかった。

「すみませーん！早苗さんいますかー？」

「はーい！……ちょっと行ってきますね」

名前を呼ばれた早苗さんはそう言い残し、席を立った。その時の表情からして、さっきの声の主を知っているかのようだ。諏訪子様と神奈子様も、誰が来たか分かっているようで、２人して顔を見合わせている。

「あの、誰が来たんですか？」

「それはあれだよ、幻想郷で一番…」

神奈子様の言葉を遮るがごとく、守矢神社の廊下をドタドタと走ってくる足音が聞こえ、そして勢いよく障子が開け放たれた。

「お食事中に失礼しまーす！」